

## 「擬音語・擬態語＋する」動詞の分類

鷲見幸美

### 0. はじめに

「わくわくする」は、(1)のようなル形でも、(2)のようなテイル形でも、現在時の話者の感情を表わすことができる。

(親友の結婚式の席で、新郎新婦入場を前に)

(1) わくわくする。

(2) わくわくしている。

「わくわく」は擬態語であるが、「ル形およびテイル形で現在の状態を表わす」ということは、「擬態語＋する」動詞の持つ性質なのだろうか。

本稿では、「擬音語・擬態語＋する」動詞を分類し、その多様性を顕在化させるとともに、「わくわくする」同様「ル形およびテイル形で現在の状態を表わす」動詞を抽出する。つまり、「わくわくする」という動詞がどのようなものであるのか、擬音語・擬態語全体の中での位置付けを試みるのである。

### 1. 擬音語・擬態語について

第一に、オノマトペ・擬音語・擬態語とはどういうものであろうか。擬音語は、動物や人間などの声や事物の音を言語音で模倣して表わした言葉、擬態語は、音響とは直接かかわりのないものを言語音で象徴的に表わした言葉、と定義される（『日本語百科大事典』pp.439-440）。しかし、擬音語と擬態語との境界がはっきりとしないため、総称的にオノマトペ・象徴語などと呼ばれることがある。擬音語・擬態語と一般語も連続的である（『国語学大辞典』p.214）。

また、擬音語・擬態語が多いことは日本語の特徴であるとされている。例えば、『国語学大辞典』（p.214）には、擬音語・擬態語が日本語の歴史を通じて多く使われつづけていることや、その多種多様な使い方が朝鮮語などととも

語において卓越していることが記述されており、また、『日本語百科大事典』(p.445)は、日本語を擬音語・擬態語の豊富な言語とした上で、それらを日本人独特の主観に根ざした表現であると指摘している。

そして、擬音語・擬態語はこれまでもさまざまな研究の対象とされてきている。小林英夫(1965, p.21)は、「わが日本語は、だれもが知るように、オノマトペの宝庫だ。」としてオノマトペを形態論的に考察したが、小林の研究をはじめとしてオノマトペの形態のパターンを分類した研究は多い。また、意味についても音象徴や語構成の観点からの研究がなされており、その他、通時の研究や対照言語学的研究もある。また、さまざまな辞書で日本語学習者を意識した意味の記述もされている<sup>(1)</sup>。

## 2. 「擬音語・擬態語 +する」動詞について

オノマトペ研究は数多くあるにもかかわらず、「擬音語・擬態語+する」動詞は派生的・二次的なものとして扱われ、あまり注目されてこなかったようである。

例えば、辞書には「わくわく」「くよくよ」「のんびり」が次のように記述されており(例文は省略)、「わくわくする」「くよくよする」「のんびりする」という動詞については特に記述がない。

### 『擬音語・擬態語辞典』

わくわく：擬態語・擬情語

[意味] 期待、喜び、楽しみなどで、気持ちがわきたって  
落ち着かないようす。

くよくよ：擬態語・擬情語

[意味] 些細なことにこだわって絶えず気にして、気分の  
晴れないようす。

のんびり：擬態語・擬情語

[意味] 心をのどかにして、体を楽にしているようす。

### 『擬音語・擬態語使い方辞典』

わくわく：[意味] 喜びや楽しみ、期待で気持ちがわきたって落ち着

かないようす。

〔用法〕擬態語

<人>が… (と) <胸>をおどらせる、ときめ  
かせる、する

くよくよ：〔意味〕何かにこだわって心配したり気にしたりして気分  
の晴れないようす。

〔用法〕擬態語

<人>が… (と) 気にする、する

のんびり：〔意味〕気持ちがのどかで体も楽であるようす。

〔用法〕擬態語

<人>が… (と) 過ごす、育つ、<する>、する  
…した<場所・生活・性格>

「ようす」とは、国語辞典の記述によれば「なんらかの判断や感情をもたらす（その人の判断や感情を通してとらえられた）物事の状態」（『新明解国語辞典』第四版 p.1329）であり、「わくわく」「くよくよ」「のんびり」はすべて状態を表わす語ということになる。また、「する」がつくつかつかないかのみが問題とされ、動詞の意味・用法は説明されていない。しかし、「わくわくする」「くよくよする」「のんびりする」の間には明らかな違いが存在する。まず、話者が自分のことについて発話する場合について考えてみよう。

(3) 今日はわくわくする。 (3') 今日はわくわくしている。

(4) \*今日はくよくよする。 (4') \*今日はくよくよしている。

(5) 今日はのんびりする。 (5') 今日はのんびりしている。

(3) ではル形でもテイル形でも話者の発話時の状態を表わすことができるのに対し、(4) ではどちらの形でも許容されない。(5) ではル形、テイル形ともに許容されるものの、ル形では発話時の状態を表わすことはできない。では、話者が第三者について発話する場合はどうであろうか。主格が第三人称に変わることによって、それぞれの文の許容度も以下のように変わるのである。

(6) \*太郎は今日はわくわくする。 (6') 太郎は今日はわくわくしている。

- (7) \*太郎は今日はいくよくよする。(7') 太郎は今日はいくよくよしている。  
 (8) ?太郎は今日のはのんびりする。(8') 太郎は今日のはのんびりしている。

また、(9)のように複合動詞化したり、(10)のように受動表現、(11)のように使役表現になったりと、一般動詞(「擬音語・擬態語+する」動詞以外の動詞)同様さまざまな用法をもつさまざまな動詞がある。

- (9) やがてうとうとしかけたと思うと、窓を激しくノックする音がする。  
 (林真理子「猫の時間」『朝日新聞』, 1994年3月13日)  
 (10) 黒髪と小柄な姿に、おもわず日本語で話しかけたら、きょんととされた。(「ひと」『朝日新聞』, 1994年8月29日)  
 (11) 「これから意志の疎通ができないイライラが高じて、別れ話にでも発展しなければいいが」と周囲をハラハラさせている。(石川幸子『国際結婚 地球家族づくり』サイマル出版会, p.26)

つまり、「擬音語・擬態語+する」動詞は、擬音語・擬態語を考察することによってその性質が必然的に明らかになるようなものではなく、それ自体を考察する必要のあるものなのである。

### 3. 「擬音語・擬態語+する」動詞の分類

#### 3.1 先行研究と問題点

西尾(1981)は、筆者同様、「(音象)する」(音象とは音象徴語、つまり、本稿での擬音語・擬態語を指す)の「する」の性質に広い幅があるであろうことに注目し、その動詞としての種々相を形態論・統辞論的に調べることを課題としている。そして、テンス・アスペクト、意志/無意志、自動詞/他動詞、ヴォイス(使役/受身)、格支配について「擬音語・擬態語+する」動詞の考察を試みている。本稿では、特に多様性が顕著なテンス・アスペクトについての考察(pp.83-86)のみを検討し、その問題点を指摘する。

西尾は、「動詞にテイルがつくつかないか、つく場合にはどういう意味になるか」を考察し、アスペクトの観点から4グループを取り出している。これは、金田一(1950)に始まる動詞の四分類、「状態動詞、瞬間動詞、継続動詞、第四種動詞」に影響を受けたものだと考えられる。しかし、金田一の四分類にあては

めているものではなく、各類の関係はよくわからない。また、各類を構成する語についてその所属状況に疑問が多い。

金田一（1950）の四分類と以下に示す西尾の<1>～<4>の分類を対照させながら、西尾分類の問題点を指摘していく。

<1>アスペクトの体系が欠けており、シテイルの形でのみ使われて、スルの形を持たない。

シテイル、シタ（連体用法のみ）の形で使われるだけであって、動的な過程を表わすことがなく、単なる状態を表わし、形容詞と通じる性格を持っている。金田一（1950）の「第四種の動詞」、宮島（1972）の「状態詞」にあたり、「さっそうとする、うっそうとする、そびえる、（高い鼻を）する」などと同様である。

「ほっそりする、あっさりする、くりっとする、うらうらする、すらりとする、ちまちまする、でっぷりする、ぱりっとする、びちびちする、びんびんする、ふっくらする、ぽちゃっとする、もっさりする、よほよほする」などがある。

たしかに、連体用法としてはシタの形が普通であり（例文（12）（13）参照）、形容詞のように最上級・比較級の意味で用いることができる（例文（14）（15）参照）、という点においては「第四種の動詞」と言える。

（12） くりっとした目

（13） びちびちした若さ

（14） 彼女がクラスで一番ほっそりしている。

（15） 姉より妹の方がぽちゃりしている。

しかし、その一方、条件節を伴えば何ら問題なくスルの形で使えるものがあり（例文（16）～（18）参照）、シタには連体用法だけでなく叙述用法もある（例文（19）（20）参照）。

（16） 彼女は、このドレスを着ると、ほっそりする。

（17） 酢を加えるとあっさりする。

- (18) 火であぶるとぱりっとする。  
 (19) 背がのびて、すらりとした。  
 (20) しばらく会わないうちに、ふっくらとした。

したがって、これらの語をすべて金田一の「第四種の動詞」にあたるものとするには問題がある。

< 2 > アスペクトの体系が欠けており、スルの形でのみ使われて、シテイルの形を持たない。

瞬間的な動きを表わす意味が強く、シテイルの形をとって継続の意味を実現できない点で「一瞥する、目撃する、パンクする」などの特殊な少数グループと似ている。「ちくっとする、はっとする、びくっとする、ぎくりとする、ひやりとする、どきんとする、ぞくぞくっとする」などがある。

金田一の分類では、シテイルの形をとらないものは状態動詞に分類される。しかし、このグループは状態を表わさず、「瞬間的な心理的・感覚的動き」という意味特徴を共有している。その意味特徴が振る舞いに影響していることが考えられる。

< 3 > スルとそれに対立するシテイルの形を持ち、シテイルは「変化の結果の継続」を意味する。

「主体に変化をもたらす動き」であり、「ほっとする、ぐったりする」などがある。

シテイルが変化の結果の継続を表わすのであれば、これらの動詞は「瞬間動詞」ということになる。しかし、以下の例のように期間を表わす語と共起する。

- (21) あまりの疲れに、しばらくぐったりした。

したがって、継続時間を持たないとは言えず、典型的な瞬間動詞ではないことになる。

<4>スルとそれに対立するシテイルの形を持ち、シテイルは「動作の継続」を意味する。

「主体に変化をもたらさない動き」を表わす動詞である。「ぶるぶるする、うろうろする、うつらうつらする、あっぷあっぷする、へどもどする、じりじりする、びくびくする、ひやひやする、やきもきする、うじうじする、どきんどきんする、にんまりする、もじもじする」などがあり、重複形式のものがわりあいに多い。

シテイルが「動作の継続」を意味するこれらの動詞は、「継続動詞」ということになる。たしかに、これらの動詞は継続時間を表わす副詞と共起する。しかし、「主体に変化をもたらさない」という点についてはどうであろうか。

(22) 彼がうっかりしゃべってしまうのではないかとだんだんひやひやしてきた。

(23) 彼の煮え切らない態度を見ているとだんだんやきもきしてきた。

(22) (23) の例のように、変化の過程を表わす「だんだん」と共起する。平静な状態からそうでない状態へ主体が変化することを表わしていると言える。

更に、テンス・アスペクトの面からは、次の問題だけがとりあげられている。

スルが未来のことではなく、話し手が話している時点での自分自身の内的状態を表わす。自分以外の人を主体とした断定の表現は成り立たない。質問文では、主体は聞き手に限定される。鈴木(1979)は、スル(現在未来形)とシタ(過去形)が対応している基本的な用法以外の、現在未来形だけにみられる特殊な用法として、「話し手の内的な状態を表わす文」をあげ、例として「歯(頭、はら…)がいたむ」「足(手)がしびれる、頭痛がする」、「胸がどきどきする、歯がずきずきする、頭がふらふらする、いらいらする、むずむずする」があげられている。その他にも、「むかむかする、ずきんずきんする、くらくらする、ひやととす、ひりひりする、ひりっとする、くさくさする、むしゃくしゃする、わくわくする」などがある。主体的な感情を表わす感情形容詞とよく似

ている。

このグループが、「わくわくする」と同じ「ル形かつテイル形で現在時を表わす」という性質を持つものである。しかし、このグループは< 1 >～< 4 >のグループと独立して考察されており、それらのグループとどのような関係にあるかが示されていない。また、スルが「話し手（主体）の内的状態」を表わす一方で、シテイルも「話し手（主体）の内的状態」を表わすことについて言及されていない。

西尾は、金田一同様「動詞にテイルがつくつかつかないか、つく場合にはどういう意味になるか」を考察したわけだが、金田一の影響を受けながらもその4分類では整理しきれなかったものと思われる。しかし、何が問題であるのか、その問題を処理するにはどのような視点が必要であるのかを明示し分類することをしなかった。また、分類の問題点も既に指摘した通りである。よって、西尾の考察は「擬音語・擬態語+する」動詞が、アスペクト的観点において一般動詞（金田一分類の対象となったような「擬音語・擬態語+する」動詞以外の動詞）と同様に多様であることを示してはいるが、分類というには不十分である。

## 3.2 分類

### 3.2.1 分類の枠組みと対象

金田一（1950）以後も、アスペクトの観点から、特に「テイル」の意味の実現のしかたに注目し、動詞の分類が行われている。本稿の分類も、金田一の考え方を基本に、西尾での問題を解決するために、鈴木（1957）、藤井（1966）、吉川（1973）を参考にしつつ新たな視点を加え、「擬音語・擬態語+する」動詞の分類を試みる。

鈴木（1957, pp.72-80）では、「する」を「している」との対立の中で、アスペクトの体系の中に位置付けている。また、動作性動詞、状態性動詞とともに動作状態性動詞（中間的な動詞）を認めている。本稿でも、この中間的な動詞を一つのグループとして認める立場をとる。以下に鈴木の場合の動作状態性動詞に関する記述を引用しておく。



動作状態性動詞：「ル」の形で、現在を表わす点においては、状態動詞に似ている。一方、「ル」形には、状態の変化を表わす側面があり、「テイル」形を持つという点においては、動作性動詞に似ている。

藤井（1966）、吉川（1973）からは、変化動詞という考え方を取り入れる。

変化動詞：一定の時間つづく徐々の変化を表わし、「テクル」の形で変化の過程を表わす。

そして、本分類では3つの枠組みを設定する。以下にその枠組みと判断の基準とともに、議論をわかりやすくするために典型的な一般動詞の例をあげておく。

### 1. 状態動詞と動作性動詞

（非動作性）状態動詞：ル形で現在を表わし、テイル形を持たない  
（ある、価する）

動作性状態動詞：ル形で現在を表わし、テイル形を持つ  
（似合う、聞こえる）

動作性（非状態）動詞：ル形で現在を表わさず、テイル形を持つ  
（笑う、終わる）

動作性形容詞の状態動詞：テイル形が一般的で、ル形は必ず条件句（節）を伴う  
（太る、あかぬける）

形容詞の状態動詞：テイル形（連体用法：夕形）のみで使われ、ル形を持たない（すぐれる、ありふれる）

### 2. 継続動詞、変化動詞と瞬間動詞

継続動詞：動きの進行を表わす「長い間ール」「一始める」「一続ける」「一ながら」（遊ぶ、読む）

変化動詞：時間の経過を伴う変化を表わす「だんだんーテクル」  
（やせる、腹が立つ）

瞬間動詞：瞬間的な変化を表わす「一タ瞬間」「一たまま」  
（止まる、見つかる）

### 3. 性質表現化する動詞としない動詞

性質表現化する動詞：主体の特徴を表現する語として使うことができる

(性質表現化動詞) 「～は一テイル」と「～は一夕人だ」を同じ状況で使うことができる(ふける、ばかげる)

性質表現化しない動詞：主体の特徴を表現する語として使うことができない

(非性質表現化動詞) 「～は一テイル」と「～は一夕人だ」を同じ状況で使うことができない(働く、すわる)

以上の3つの枠組みの下位区分を組み合わせ、例えば、「笑う」という動詞であれば、<動作性><継続><非性質表現化>動詞という名称を与える。その名称を同じくするものを1つのグループとする。

更に、動作性動詞を「ル形が未来を表わすか否か」によって下位分類する。「現在を表わさない、未来を表わさない、条件句を必要としない」ル形が存在することになるが、それらがどのようにして用いられるのかを確認するために「ル形が『よく』と共起する」というテスト項目を設けた。また、テイル形についてその状態性の程度を知るため、「テイル形が程度副詞と共起する」、「テイル形が『いつも』と共起する」というテスト項目を設けた。程度副詞と共起することにより状態性の高いことが確かめられる。また、程度副詞とは共起し「いつも」と共起しないことにより、より動作性の低いことが確かめられる。

なお、分類の対象とする語は192語である。対象語を決定するために、まず、『擬音語・擬態語使い方辞典』の見出し語738語の中で、「する」がつく328語を取り出した。次に、その328語の中から人が主体となるものを230語選び出した。人が主体となるものに限ったのは、「わくわくする」が人を主体にするため、それに近いものを対象とすることにしたためである。更に、230語のうち「<人>はAがースル(シテイル)」のAが容易に補えるもの38語を除いた<sup>(2)</sup>。主体は<人>でなくその一部であるAだと考えるからである。その結果、分類の対象とする語は192語に絞られた。

#### 3.2.2 分類の結果

以上のようにして、分類テスト項目、対象語を決め、192語について計16項目のテストをした。その結果、以下に示すように分類された。各グループを構成する語の中にも、典型的なものと同期的なものがあり、各グループは、連続的なものである。

[1] <動作性状態><変化><非性質表現化>動詞

いらいらする、うずうずする、くさくさする、ぞくぞくする、どきどきする、はらはらする、ひやひやする、むかむかする、むしゃくしゃする、むしゃむしゃする、むずむずする、もやもやする、やきもきする、わくわくする(14語)

この類は、ル形で現在時を表わしテイル形を持つ。「わくわくする」と同じ振る舞いをする。振る舞いが同じであるとともに、「感情<sup>(3)</sup>を表わす」という点も共通している。

(24) 「もうイライラするわね。ちょっとガス、どっかからもれてるんじゃないの」(つかこうへい『青春かけおち篇』角川書店, p.212)

「だんだん」と共起し、「一テクル」という形を持つ。徐々に程度が高まっていく過程をとらえることができる。

(25) 私は嬉しくて、自分のことのように胸がどきどきしてきたものであった。(上山民栄『日本語教室への招待 - 渡米20年の体験からのアメリカを知る眼・日本を見る眼』大和出版, p.59)

(26) あいつの、なんでもわかっているというようなしたり顔を見ているとむかむかしてくるよ。(阿刀田稔子・星野和子『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社, p.529)

以上の例では、これらの動詞がある状態からある状態への変化(程度の高まり)を表わしており、1つの変化に、時間の経過が伴っていると考えられる。一方、以下の例では、いくつかの変化が反復することにより一定の状態を保っており、この反復に時間の経過が伴うと考えられると思われる<sup>(4)</sup>。

(27) しかし、やがて私はイライラし始め、ついには胸がムカムカし始めるのである。(林真理子『夢みるころを過ぎて』角川文庫, p.187)

- (28) 免許取り立ての人の車に乗せてもらったが、はらはらしどおしかった。(日向茂男・日比谷潤子『擬音語・擬態語』(外国人のための日本語例文・問題シリーズ14) 荒竹出版, p.92)
- (29) いつ子供が飛び出して来るかわからない道なので、ヒヤヒヤしながら運転した。(アンドルー・チャン『<和英>擬態語・擬音語分類用法辞典』大修館書店, p.122)
- (30) 合格の発表をわくわくしながら待っていた。(浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』角川書店, p.340)

[ 2 ] <動作性><継続><非性質表現化>動詞

[ 2 ] は、「ル形が未来を表わすか否か」によって2つのグループに下位分類できる。

1) うろうろする、ごろごろする、ぶらぶらする、ゆっくりする(4語)

ル形で未来を表わしテイル形を持つことから動作性の動詞であるが、動作性とは言え、意味的にはおよそ「積極的に何もしないことを表わす」点で4語が共通している。

(31) サンクスギビングの夜くらい俺もゆっくりとしたい。(村上春樹『やがて哀しき外国語』講談社, p.120)

(31') サンクスギビングの夜はゆっくりする。

「～は—テイル」を「～は—タ人だ」に言い替えることができない。

(32) なぜあの子は私の廻りをうろうろするのだろう。

(32') あの子はうろうろしている。

(32'') \*あの子はうろうろした子だ。

2) いじいじする、いそいそする、いちゃいちゃする、うじうじする

うつらうつらする、うとうとする、おずおずする、おたおたする

おどおどする、おろおろする、がたがたする、きょときよとする

きょろきょろする、ぐずぐずする、くよくよする、こそこそする

ごそごそする、じたばたする、せかせかする、ちやほやする、ちょ

こちょこする、ちょろちょろする、どたどたする、どたばたする

とろっとする、とろとろする、にこにこする、にたにたする、にち  
 ゃにちやする、にやにやする、にんまりする、ぺこぺこする、べた  
 べたする、へらへらする、ぼさっとする、ぼやぼやする、まごまご  
 する、めそめそする、もごもごする、もじもじする、もそもそする  
 もたもたする、わさわさする（43語）

ル形を持ち継続時間を持つという点では、動作性の継続動詞であり、性質表現  
 化しないという点で1)と同じ性質を示す。一方、「よくール」のように言えて  
 も特定の現在時や未来時を表わすことはなく、時を表わす表現と共起しない。そ  
 の点で1)と異なる。

- (33) 麻衣はうとうとしながら哀し気に微笑した。（森瑤子『嫉妬』集英社，  
 p.162）
- (34) いつのまにかウトウトし始め、オレは夢を見ていた。（つかこうへい  
 『青春かけおち篇』角川書店，p.126）
- (35) とにかく彼らが店に入ってきたりすると、私は急に目を伏せてオドオ  
 ドし始める。（林真理子『夢みるところを過ぎて』角川文庫，p.188）
- (36) 中野はオロオロしながら、キチンとマジックを定規にあてたりして、  
 まめめめしく図面をひいている。（つかこうへい『いつも心に太陽  
 を』角川書店，p.270）
- (37) シゲルはニコニコしながら俺の顔をのぞきこんでいた。（つかこうへ  
 い『いつも心に太陽を』角川書店，p.20）

[ 3 ] <動作性><継続><性質表現化>動詞

のんびりする、ふらふらする、ぼーっとする（3語）

未来を表わすことができ、意味の上では「積極的に何もしないことを表わす」  
 という点で[ 2 ]—1)と同じ性質を示すが（例文(38) (39)参照）、性質表  
 現化する点では異なる（例文(40)参照）。

- (38) 明日はうちののんびりする。
- (39) 長逗留になると手持ち無沙汰になってきて、一日中ボーッとしていた  
 り、退屈したりと、時間の使い方に困ったりしたものだ。（石川

幸子『国際結婚 地球家族づくり』サイマル出版会, p.86)

- (40) 太郎はのんびりしているから、きっとまだ準備でもしているんでしょう。
- (40') 太郎はのんびりした人だから、きっとまだ準備でもしているんでしょう。

[4] <動作性><変化><非性質表現化>動詞

[4]の中には、継続動詞よりのものと、瞬間動詞よりのものがあり、中心的な変化動詞を合わせて、3つに下位分類できる。

- 1) あっぶあっぶする、はーはーする、ふーふーする、ほろっとする  
(4語)

ル形を持ち、条件句(節)を必要としないから動作性動詞である。更に、「だんだんーテクル」ということができるので変化動詞であるが(例文(41)参照)テイル形が状態副詞と共起することがなく、変化動詞とは言え主体の状態変化の程度が低く、より動作的で継続動詞に近いと言える(例文(42)参照)。

(41) あまりの仕事の量に、だんだんあっぶあっぶしてきた。

(42) \*とても/\*非常に/\*かなり あっぶあっぶしていますから、もう仕事を増やさないください。

- 2) うんざりする、がつつする、ぐんなりする、げんなりする、しみりする、そわそわする、だらだらする、でれでれする、どぎまぎする、ばたばたする、びくびくする、ぶりぶりする、ぶるぶるする、ぶんぶんする、へどもどする、ほくほくする、よたよたする、よろよろする(18語)

ル形を持ち継続時間を持つ(例文(43)~(47)参照)、更に、「だんだんーテクル」と言え、変化動詞である(例文(48)~(50)参照)。1)と異なるのは、程度を表わす表現が共起する点である(例文(51)(52)参照)。また、次の3)のように「一夕瞬間」や「一夕まま」ということができず典型的変化動詞に比較的近いグループだと言える。

(43) 部屋の隅で埃をかぶっているテレビジョンの方へ、苦勞して牀の向き

を変えると、アガサは期待でそわそわしながら、(以下略) (森瑤子『熱い風』集英社, p.17)

(44) 五時になったらそわそわしだして、子供たちや夫の元に飛んで帰ってしまうような友だちが、いったい何だっていうのよ。(森瑤子『熱い風』集英社, p.111)

(45) ジミーは、ヨモギに対する賛辞を強要されていることにうんざりしながら、それでも半ばヤニ下がりながら答えた。(野中柊『アンダーソン家のヨメ』福武文庫, p.19)

(46) (以上略) 花嫁っていうモンは、皆にちやほやされて母親に見守られて、ニギヤカに、時にはシンミリとしながら着つけをするもんじゃないの、(以下略) (野中柊『アンダーソン家のヨメ』福武文庫, p.193)

(47) よたよたしながらゴールにたどりついた。

(48) 連日連夜のパーティで、だんだんうんざりしてきた。

(49) 5時が近くなるにつれて、だんだんそわそわしてきた。

(50) 式が近づくにつれ、だんだんしんみりしてきた。

(51) 結婚して以来こんな質問に出くわすことが多く、正直なところ驚いてもいるし、多少うんざりしてもいる。(石川幸子『国際結婚 地球家族づくり』サイマル出版会, p.34)

(52) こんなお席に招待されて、非常にどきまぎしております。

3) — (i) さっぱりする、すーっとする、すかっとする、すっきりする、ほっとする、むっとする (6語)

— (ii) がやがやする、ざわざわする、しんとする、ひっそりする (4語)

— (iii) うっとりする、がっかりする、がっくりする、ぐったりする、しょぼんとする、しょんぼりする、ぼーっとする (7語)

3) は、変化動詞でありながら、「一瞬間」、あるいは、「一タまま」と言えるものや、またその両方を言えるものであり、変化動詞の中でも瞬間動詞に近いものだと言える。以下、(i) (ii) (iii) に分けて説明していく。

3) — (i) の6語は、感覚的・心理的な変化を表わす。タ形で発話時の心的

状態を表わすことができる。「さっぱりする→さっぱりした→さっぱりしている」という時間的順序がはっきりしている。「だんだんすっきりしてくる」とも「すっきりした瞬間」とも言え、変化が徐々に起こる場合も瞬間的に起こる場合も考えられる。

(53) しばらくトントンとドアを叩いていたが、ようやくあきらめたのか、ドアを立ち去る気配がしてオレはホッとした。(つかこうへい『いつも心に太陽を』角川書店, p.51)

(54) あの人並みはずれて元気で活動的だった盛田さんのこと、まずはほっとしている。(中村紘子「時差はどうなる」『日本経済新聞』夕刊, 1994年4月25日)

「ほっとする」には程度の差が考えられる。つまり、「少しほっとした」状態からだんだん「とてもほっとした状態」へ変化することがある。しかし、必ずしも「程度の差」が意識されるわけではなく、「少し」にしる「とても」にしる気持ちの変化の変わり目だけをとらえることもできるのだと考えられる。

(55) マドコは一人になると、やっと少しホッとした気持ちになれたけれど、アンダーソン夫人が彼女をほっておいてくれるはずがなく、(以下略) (野中柊『アンダーソン家のヨメ』福武文庫, p.202)

(56) マドコはとてもほっとした。

3) — (ii) の4語は、主体が複数に限られるという点で共通している。

(57) ) 子供たちは、動揺してざわざわしている。

(57' ) \*太郎は、動揺してざわざわしている。

その主体は、「人」というよりむしろ場面、場所を指しているような場合もある。

(58) 動揺の静まった教室は、しんとしている。

3) — (iii) の7語は、(i)、(ii) のどちらにも属さないものであるが、「だんだん—テクル」と言え(例文(59)参照)、程度を表わす表現が共起し(例文(60)(61)参照)、「一夕瞬間」、あるいは、「一夕まま」と言える(例文(62)参照)という点でより瞬間動詞的な変化動詞であること、また、性質表現化しないという点では、(i)、(ii) と同じ性質を示す。



- (59) 彼女を見ていると、あまりの美しさにだんだんぼーっとしてくる。
- (60) ーうーん、怒ってるっていうより、ちょっとばかり、がっかりしているんだと思うわ。(野中柗『アンダーソン家のヨメ』福武文庫, p.123)
- (61) 理解なんかあるもんか。オヤジもオフクロも、オレが大学を卒業した後、大学院にもビジネス・スクールにも法律学校にも興味がないうって言ったとき、ひどくガッカリしたし、(以下略)(野中柗『アンダーソン家のヨメ』福武文庫, p.176)
- (62) ぼーっとしたまま歩いていたら、溝に落ちてしまった。

[ 5 ] <動作性><変化><性質表現化>動詞

だらっとする、つんつんする、つんとする、ぶすっとする、ほけっとする、ぼんやりする、むすっとする、むつつりする(8語)

「だんだんーテクル」という表現が可能であり、変化動詞であるが(例文(63)(64)参照)、「ータまま」と言える点で、瞬間動詞よりであると言える(例文(65)参照)。性質表現化する点で[4]と異なる(例文(66)参照)

- (63) しばらくは緊張感があったが、だんだんだらっとしてきた。
- (64) さっきまであんなに機嫌がよかったのに、話しをしているうちにだんだんぶすっとしてきた。
- (65) むすっとしたまま話すのはやめて。
- (66) 決してツンとした美人ではなく、笑うと八重歯が印象的な、童顔の愛くるしい顔だちだった。(林真理子『夢みるころを過ぎて』角川文庫, p.119)
- (66') 彼女は美しいが、つんとしている。
- (66'') 彼女は美しいが、つんとした人だ。

[ 6 ] <動作性><瞬間><非性質表現化>動詞

あんぐりする、かっとする、ぎくっとする、きっとする、ぎゃふんとする、ぎょっとする、きょとんとする、ぞっとする、どきっとする、はっ

とする、びくっとする、ひやっとする、ぼかんとする、むかっとする  
(14語)

「瞬間的な心理的・感覚的動き」を表わすグループであり、かなりテイルになりにくいものもある。しかし、その「なりにくさ」にも程度があり、例えば、次の例にあるものや「あんぐりする」などはテイル形でも自然だと言える。「心理的・感覚的」ということが影響していることが感じられる。つまり、「あんぐりする」「ぼかんとする」「きょとんとする」のように、心理的動きであっても表情を伴う（あるいは、表情に心理的動きが伴うと言う方がより適当かもしれない）ものではテイル形が無理なく使えるのである。

(67) やれヒューマ・リーグだのバナナラマだのという会話が出てくると、たいてい私は口をあけてポカンとしているはずだ。(林真理子『夢みるところを過ぎて』角川文庫, p. 114)

(68) (以上略)、幸い、「しくじる」という言葉の意味をしらなかったジミーはきょとんとしていた。(野中柊『アンダーソン家のヨメ』福武文庫, p.15)

[ 7 ] <動作性形容詞の状態><変化><非性質表現化>動詞

びんびんする、よぼよぼする (2語)

これらの2語は、<変化動詞>でありながら、「長い間一テイル」「一テイル間」と言えない(例文(69)参照)。これは「形容詞的性格」のためだと考えられる。つまり、「一テクル」という形式が可能であり変化の過程を持つという意味では動詞的であり、時間・過程が意識されている(例文(70)(71)参照)のだが、状態化した時には時間・過程ということが意識されない表現になるのだと考える。

(69) \*あの人は、長い間よぼよぼしている。

(70) 年をとれば、よぼよぼする。

(71) 80を過ぎたら、だんだんよぼよぼしてきた。

[ 8 ] <動作性形容詞の状態><変化><性質表現化>動詞

[8] は、「『いつもーテイル』と言えるか否か」によって、2つのグループに下位分類できる。

- 1) おっとりする、がさがさする、ぎすぎすする、きちっとする、きちんとする、きりっとする、げっそりする、しっかりする、しっとりする、しゃきっとする、しゃんとする、ちゃんとする、ねちねちする、ねとねとする、はっきりする、びしっとする (16語)

長期的な変化として、その変化の過程をとらえることができ(例文(72)参照)、それが状態化して性質表現化した場合変化の過程は意識されない(例文(73)参照)。

(72) 社会人になったら、だんだんしゃきっとしてきた。

(73) ジミーは、へーっ、そうなのかなあ、そんなもんかねえ、いつもあんなにきちんとしているのにねえ、人は見かけによらないっていうことか、(以下略)(野中柊『アンダーソン家のヨメ』福武文庫, p.29)

(73') あの人は、きちんとしている。

(73") あの人は、きちんとした人だ。

一方で、その場限りの変化という可能性もあり、「いつもーテイル」と言うことができる。

(74) 家ではいい加減だが、学校へ行けば、ちゃんとする。

(74') 学校では、いつもちゃんとしている。

(75) 課長は、お酒を飲むとねちねちする。

(75') お酒を飲むと、いつもねちねちしている。

- 2) がしっとする、がっしりする、がっちりする、ころころする、すらりとする、ずんぐりする、でぶでぶする、ひよろひよろする、ぶくぶくする、ふっくらする、ぶよぶよする、ぼちゃぼちゃする、ぽちゃりする、ぼってりする、ぼてぼてする (15語)

長期的な変化としてのみその変化の過程をとらえることができる。したがって、「いつもーテイル」というように言えない。その点で1)と異なる。「体格の変化」を表わすグループと言える。

(76) 中学生にもなれば、すらりとするよ。

(76' ) \*太郎はいつもすらりとしている。

(77 ) 太郎はすらりとしている。

(77' ) 太郎はすらりとした人だ。

[ 9 ] <形容詞の状態><非性質表現化>動詞

うじゃうじゃしいてる、うようよしいてる、けばけばしている、けろけろしている、こせこせしている、しゃーしゃーとしている、のそのそしている、ぼさぼさしている ( 8 語 )

テイル形でのみ使われ、性質表現化することがない。

(78) 大学のまわりもパークレーはなにしろ賑やかで、ヒッピーやらヌーディストやらホームレスやらがうようよしている。(村上春樹『やがて哀しき外国語』講談社, p.117)

[10] <形容詞の状態><性質表現化>動詞

あっさりしている、きっちりしている、さばさばしている、さらりとしている、じめじめしている、ちまちましている、ちかちかしている、ちゃっかりしている、ちゃらちゃらしている、なよなよしている、のーのーとしている、のほほんとしている、のらくらしている、のりりくらししている、ぴちぴちしている、ふにゃふにゃしている、ふわふわしている、へなへなしている、ほそっとしている、ほんわかしている、もさっとしている (21語)

テイル形でのみ使われ、性質表現化する。

(79) 百円玉や十円玉をでっかいビンにシコシコためて、それでいて悲しいビンポーって感じがするわけでもなく、ちゃっかりしているけれど憎めなくて、やがて小銭がビンにいっぱいたまると、「南欧石畳の街と恋のリビエラ周遊の旅・十一日間四十二万五千元」に出かけたりする女の人って。(天野祐吉「CM天気図」『朝日新聞』, 1994年3月12日)

[その他] あーんする、うっかりする、ぱっとする、ぼやっとする、よちよちする(4語)

これらの5語は、現段階では上記の10のグループのいずれにも位置づけられないものである。

#### 4. まとめ

本稿では、「わくわくする」の類を「擬音語・擬態語+する」動詞全体の中に位置付けることを試みた。分類の結果、「擬音語・擬態語+する」動詞の多様性が示されると同時に、「わくわくする」と同様の振る舞いをする14の動作性状態動詞「いらいらする、うずうずする、くさくさする、ぞくぞくする、どきどきする、はらはらする、ひやひやする、むかむかする、むしゃくしゃする、むしゃむしゃする、むずむずする、もやもやする、やきもきする、わくわくする」が抽出された。また、これらの「ル形およびテイル形で現在の状態を表わす」動詞を「動作性状態動詞」として認めたが、これらの動詞は文法的振る舞いのみでなく、意味の上でも「感情を表わす」という共通点を持つことが明らかになった。

#### 注

- (1) 雑誌においても、擬音語、擬態語の特集が組まれている。古くは、「言語生活」1965年12月号で、石垣幸雄、小林英夫の形態についての研究や、小島孝三郎の詩におけるオノマトペの研究、鈴木雅子の通時の研究などが発表されている。また、比較的新しくは、1986年7月の「日本語学」、1989年7月の「日本語教育」、1993年6月の「月刊言語」などがある。辞書は、天沼寧(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版、浅野鶴子編(1978)『擬音語・擬態語辞典』、三戸雄一編(1981)『日英対照：擬声語(オノマトペ)辞典』学書房、白石大二(1982)『擬音語・擬態語活用辞典』東京堂出版、尾野修一編(1984)『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂出版、藤田孝・秋保慎一編(1984)『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』金星堂、松田徳一郎監修(1985)『漫画で楽しむ英語擬音語辞典』研究社、アンドルー・チャン(1990)『<和英>擬音語・擬態語分類用法辞典』大修館書店、阿刀田稔子・星野和子(1993)『擬音語・擬態語辞典使い方』創拓社、等がある。

## (2) 分類対象から除いた語

(頭が) きんきんする、くらくらする、ぐらぐらする、(目が) きょろきょろする  
 きょろっとする、ぎらぎらする、くつきりする、くりくりする、ぐりぐりする、しょ  
 ぼしょぼする、ちかちかする、(肌が) かさかさする、ぎとぎとする、ざらざらする  
 すべすべする、つるつるする、(髪が) くしゃくしゃする、ぐしゃぐしゃする、さら  
 さらする、つやつやする、ふさふさする、もしゃもしゃする、(腰が) ぎくぎくする  
 (背筋が) ぴんとする、(膝が) がくがくする、(手足が) びりびりする、(胃が)  
 ちくちくする、(胸が) きゅーんとする、じーんとする、(体が) くにかくにゃする  
 ぐにゃぐにゃする、くねくねする、ごつごつする、しなしなする、(関係が) ぎく  
 しゃくする、ごちゃごちゃする、しっくりする、(生活が) きゅーきゅーする

(3) 感情のみでなく感覚を表わすものも含まれるが、感覚を表わすものについても感情  
 も表わす。したがって、どの語も「感情を表わす」という点で共通している。

(4) これらの動詞における継続とは、三つのとらえ方が考えられるのではないだろう  
 か。例えば、「はらはらしている」という場合、「少しはらはらしている」状態か  
 ら、だんだん程度が高まって1つの変化が完了する過程が継続しているともとらえ  
 られるし、一度の心の動きの結果としてある一定のはらはらした状態が継続してい  
 るともとらえられる。更には、心が一度動く「はらはらする」が、反復することによ  
 って、一定の状態を保つ過程が継続しているともとらえられる、という意味であ  
 る。このことについては、今後の考察課題とする。

## 引用文献

- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』  
 (1976) pp.7-26 むぎ書房。  
 小林英夫(1965)「擬音語と擬容語」『言語生活』171号 pp.18-29 筑摩書房。  
 鈴木重幸(1957)「日本語動詞のすがた(アスペクト)について—スルの形と～シテイ  
 ルの形」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』(1976) pp.65-95 むぎ書房。  
 一 (1979)「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の叙述  
 断定のばあい—」言語学研究会編『言語の研究』 pp.5-59 むぎ書房。  
 高橋太郎(1976)「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」金田一春彦編『日本語動詞  
 のアスペクト』(1976) pp.157-327 むぎ書房。

- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 西尾寅弥（1981）「「（擬音語・擬態語）+する」の形式について」『語学と文学』20  
pp.82-96 群馬大学語文学会.
- 藤井正（1966）「「動詞+ている」の意味」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』  
（1976） pp.99-116 むぎ書房.
- 宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告44.秀英出版.
- 吉川武時（1973）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のア  
スペクト』 pp.157-327 むぎ書房.
- 『擬音語・擬態語辞典』浅野鶴子編（1978）角川書店.
- 『擬音語・擬態語使い方辞典』阿刀田稔子・星野和子（1993）創拓社.
- 『国語学大辞典』国語学会編（1980）東京堂出版.
- 『新明解国語辞典』第四版 金田一京助他編（1989）三省堂.
- 『日本語百科大事典』金田一春彦・林大・柴田武（1989）大修館書店.

（すみ ゆきみ 日本語文化）